

【国語】 <小学校 第5学年>

1 結果のポイント

- 「聞く能力」については、話し手がどのような理由で意見を述べているかを考えて聞く力をみる問題など、多くの問題の正答率が90%を上回っており、力が十分身に付いている。
- 「書く能力」については、考えを分かりやすく伝えるために立場や理由をはっきりさせて書く力をみる問題などの正答率が80%を上回っており、力が身に付いている。他方、経験を根拠として意見を書く力をみる問題の正答率は70%を下回っており、力が十分身に付いているとはいえない。
- 「読む能力」については、説明されている内容を正しく読む力、事実と意見が書かれている部分を区別して読む力をみる問題などの正答率が80%程度であり、力が身に付いている。他方、分かりやすく伝えるための表現の工夫を考えながら読む力をみる問題の正答率は60%を下回っており、力が十分身に付いているとはいえない。
- 「言語についての知識・理解・技能」については、漢字を正しく読む力をみるすべての問題の正答率が90%を上回っており、力が十分身に付いている。他方、必要な語句について辞書を利用して調べる力、漢字を正しく書く力をみる一部の問題の正答率は60%程度であり、力が十分身に付いているとはいえない。

2 結果の分析

(1) 話し手の思いを考え、工夫された効果的な組立てをとらえながら聞く力をみる問題の例

(「聞く能力」)

<問題> の二

二 大森さんの話し方のよい点を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を□の中に書きましょう。

- ア 自分の意見のあとに理由を入れて話している。
- イ いろいろな数字を入れて、具体的に話している。
- ウ ほかの友達の意見を入れて話している。
- エ いろいろな国の例をあげて話している。

<結果> 正答率 92.5% (正答 ア)

<分析>

この設問は、大森さんの1分間スピーチについて、工夫された効果的な組立てをとらえながら聞く力をみる問題である。正答した児童は、話し手の「話題、意見、理由」の三つの内容を正しく聞き取るとともに、「話題→意見→理由」という組立てをとらえることができたと考えられる。誤答が多かったものは、ウである。これは、大森さんのスピーチの組立てをとらえられず、スピーチの中心となる自分の意見を明らかにする際の「これでいいという考えもあるかもしれませんが」という言葉にのみ着目し、話し手のさまざまな立場への配慮と、他の友だちの意見を入れることを混同したためと考えられる。

(2) 自分の意見を分かりやすく伝えるために、適切な理由をあげ、意見と理由を整理して書く力をみる問題の例 (「書く能力」)

<問題> の四

四 大森さんのスピーチと、そのあとの話し合いで出た意見から、「たて書きと横書き」について、あなたはどのように考えますか。あなたの意見（たて書きがよい、横書きがよいなど）と、そのように考えた理由を、五行以上七行以内で書きましょう。

<結果> 正答率 86.2%

<分析>

この設問は、話し合いの内容から「たて書きと横書き」について自分の考えをもち、意見と理由を整理して書く力をみる問題である。正答した児童は、たて書きがよいか横書きがよいかについての自分の考えを明確にし、考えについての理由を、話し合いの中の意見を引用したり、自分の体験を踏まえたりして述べることができていた。誤答のほとんどは、自分の考えはもててはいるが、意見と理由をはっきりと分けた構成で書くことができていないものであった。

題材は違うが設問形式が同じである昨年度の問題の正答率は、80.3%であった。約6%正答率が高くなっており、昨年度以上に「書くこと」の力が身に付いてきていると考えられる。

(3) 文章構成や語句の使い方を手がかりに、考えを効果的に伝えるための筆者の工夫をとらえる力をみる問題の例（「読む能力」）

<問題> ㉓の三

三 読書のよさを分かりやすく伝えるために、筆者は第6段落で特に書き方を工夫しています。どのような工夫をしていますか。次のア～エの中から一つ選び、その記号を□の中に書きましょう。

- ア これまでのことを短く分かりやすく整理して、文章をまとめようとしている。
- イ 読書のよい点だけをあげることで、読書の大切さやすばらしさを強調している。
- ウ 読書の不十分さをあげることで、実際に体験することの大切さを強調している。
- エ 実際の体験から得られることと比べることで、読書のよさをいっそう強調している。

<結果> 正答率 54.8% (正答 エ)

<分析>

この設問は、文章構成や語句の使い方を手がかりに、考えを効果的に伝えるための筆者の工夫を読む力をみる問題である。正答した児童は、「しかし、人が実際に体験することには限りがあり」の表現から、実際に体験することと読書を通して体験することを比較して、筆者が読書による体験の広がりをもよとして述べていることを読み取ることができていた。誤答が多かったものが、ウである。筆者が意見として述べている「読書のよさ」について読み取れず、段落の最初の「とはいえ、読書だけが生き方を考えるたった一つの方法というわけではありません。」という表現だけに着目して意見を取り違えたと考えられる。

(4) 4年生までに習った漢字を正しく書く力をみる問題の例（「言語についての知識・理解・技能」）

<問題> ㉔の(3)(4)

- (3) きせつの 話題を 入れる。
- (4) みんなで きょうりよくしましょう。

<結果> ㉔の(3) 正答率 56.9% ㉔の(4) 正答率 91.5%

<分析>

この設問は、4年生までに学習した漢字を正しく書く力をみる問題であるが、設問によって正

答率に差があった。「季節」は正答率が低かったが、平成15年度の正答率57.9%と同程度の結果であった。誤答の多くは「季」の文字の間違いであり、「委」など形の似たものと間違えた例が多かった。「協力」は正答率が高いが、日常の学校生活の中でよく使われる言葉であり、使用頻度の違いが(3)と(4)の正答率の差になっていると考えられる。

3 分析を踏まえた指導の改善

(1) 指導計画の工夫改善

- ・年間指導計画では、学校の実情や児童の実態に即した単元の配列と配当時間を工夫し、特に「読むこと」の指導事項「エ 書かれている内容について事象と感想、意見の関係を押さえ、自分の考えを明確にしながらかくこと」と、「書くこと」の指導事項「エ 事象と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること」を重点とした単元を設定する必要がある。その際、2学年のまとまりを生かした指導内容の適正配置及びその定着を図るための領域の関連付けを工夫していくことが大切である。
- ・単元指導計画においては、単元の具体的な評価規準を設定するとともに、適切な言語活動を通して指導することが重要である。例えば、前述の「読むこと」の指導事項エについては、単元の初めに児童が自分の考えを明らかにし、筆者の意見についてどのように考えるか、単元を通して常に意識しながら主体的に読み深める学習を大切にすることなどが考えられる。

(2) 指導方法の工夫改善

- ・「話すこと・聞くこと」においては、話し手の意図は何か、伝えたいことは何か、それを伝えるための適切で効果的な組立てや言葉遣いはどうかを考えながら、話したり聞いたりできる力を育てる指導が重要である。そのために、日常生活に関連する具体的な場を設定し、五つの言語意識を明確にして、児童が主体的に学習に取り組めるようにしたい。さらに、「話すこと・聞くこと」について、相互に関連をもたせ、相まって力を身に付けていくことができる配慮が必要である。
- ・「書くこと」においては、体験したことなどに関連付けながら自分の考えをもち、その根拠となる事柄や具体例などを適切に選び、目的や意図に応じて筋道立てて書く力を育てる指導が重要である。そのためには、目的や意図を明確にもって書く場面を設定したり、優れた表現を通して材料の効果的な取り上げ方や文章の構成について、児童自らが気付くように指導することが大切である。特に、手紙を書いたり、課題について調べたことをまとめた文章に表したりするなど、読み手を意識した言語活動を積極的に取り入れることが重要である。
- ・「読むこと」においては、目的や意図などに応じて、文章の内容を的確に押さえながら要旨をとらえる力を育てる指導が重要である。そのために、文章の内容と、それを伝えるための筆者の述べ方の工夫の両方に着目して文章を読む学習を行う必要がある。このような学習の中で、児童が文章中の事実の述べ方と感想の述べ方の違いに気付き、筆者がどのような事実に基づき、どのような考え方や論理を用いて読者に伝えようとしているかを考え、読み深めることができるようにしたい。さらに、児童が主体的に読むことができるように、児童自身の立場から筆者の意見についてどのように考えるかを意識させる指導が大切である。

(3) 学習環境の工夫、学習集団の育成等

- ・「話すこと・聞くこと」「書くこと」等の国語科で身に付けた力が日常生活の中で発揮できるように、学校教育全体の中で発揮できる場を明確にし、意図的に発揮させることが大切である。
- ・他教科等と国語科との関連を図り、発言の仕方やノートの書き方等が高まるよう配慮するとともに、学校図書館の活用を積極的に行うことが大切である。
- ・辞書類の使用や、学習した漢字を文章中で使うことなどを習慣化させるとともに、音声言語・文字言語両面にわたる言語環境を整備していくことが大切である。